

神宮領庄園の解体と自治体の形成

御巫清直著「三方年寄執政濫觴之衰」について

加 藤 昇
松 村 勝 順

幕末における神宮神官は、対外関係による神国思想に根ざす
振興の本源たる自覚の上に立つた。その自覚は、神宮の歴史的
回顧の上に立脚したゞけに、中世神宮の隆盛から衰退過程をと
つて、現実の狀態になつたことを慨歎し、神国思想の隆盛を契
機として、神宮の隆盛を再現する願望を持つに至つたのである
。幕末におけるかゝる自覚に因連するものとして、定代弘訓、
御巫清直、井阪徳辰、國田弁良、等に代表される神宮神官の數
多くの著作が残されてゐるのである。彼等に共通して、元弘、
建武が神宮衰退の一つの時期を画した事と、室町期における神
役人自治体制の興隆による、神宮支配收納の最後の極点が失わ
れた事を、大きくとり上げてゐることである。

定代弘訓の「神境合戦類聚」、井阪徳辰の「刀祢式部類」中
の「刀祢式表廃ノ事」、および御巫清直の「神境合戦類聚小補
」および、「三方年寄執政濫觴之手」などは、その代表的な
ものである。

前三者のものは広く世人の知る所であるが、御巫清直著「三
方年寄の執政濫觴之手」は、まだ世に紹介したものの乏かない
のである。勿論これは前三者に比較して、何等内容的に異ると

ころはないが、井阪徳辰の刀祢恥の表廃之、神役人年寄の政權
掌握と因連付けた立場は、清直の三方年寄執政濫觴之事に同
様に見られる。後者の稿が何時のものか不明であるが、前者は
清直によつて、文久三年九月に書写されているから、その以後
のものと思われるし、共に弘訓の弟子として親交のあつたゞけ
に、共通する所のあるのは当然といわねばならない。清直の稿
はわずかに美濃紙三枚の面単なものであるが、神宮の宮川以乘
の空間における、支配收納權行使の未端を刀祢の衰退と、神役
人の経済的上昇による政權掌握過程とを因連させて、それを段
階的に把握したものである。以下その内容を、紹介してみよう
としよう。

三方年寄執政濫觴之衰

寛政日次記云明德三年六月廿三日神人等有確執合戦

候る不神人云若祭主還司より里次才の命令と

承て往昔より里神郡之政務を支配する大小の刀祢

本を云刀祢ハ權任本の神官を以て任せたる故

神人と云なり

松垣貞次語記云神人騒動之起ハ地下の五位不て不起

家不破風とうたせましさと云地下ハうつへきといふ
よ里争起れ里

授る不地下の家と云ハ他所より移住せし富家の

神民今え三方年奇木の家と云な里是日次記不

神役人或者土一揆と称す神役人と云ハ是此彼家

との祖先本別室物忌提社祝部頭工小工河守本貳役

と様き居外故な里土一揆と云ハ神領の土地ニ而

一揆発興して神人の刀祢と争戦せし故な里 但し

此時刀祢方敗北せ利

日次記云去正長二年七月十二日山田の神人神役人と合戦祢宣

注進状云正長二年七月十三日神人土一揆合戦

授る不正長二年九月十一日改元永享元年なり此時刀祢方

又打負く才二度の敗北な里

中世もおわりに近づく、御師などの活動と相まつて、伊勢

参宮とする参宮客も増え、それにつれて山田の門前町も大きく

なつていった。これと併行して外宮、内宮の勢力の争い、古い

神人層と新興の神役層との対立が激化していった。明徳三年、

ついにこの対立は収まることなく、山田の神人が相争つて確執

合戦となつた。これを始めとして、戦は幾度となくくり返され

これに北畠の国司勢力も介入して、複雑な歴史を展開するわけ

である。この史料は才一回目、二回目の合戦とのべ、その原因

及び、戦の主体となつた神人、神役人の事について定義してい

る。原因については、地下人で五位の位以下の家柄のものが、

自分の家に婿を築くことの善悪の論争に求めている。

又、神人、神役人を夫々定義しているが、神人とは祢宜と世

襲してきた荒木田、度会の家系につながらるもので、神役人は新
しく経済的な実力をもつて抬頭して、神宮に奉仕するようにな
つた荒木田、度会両姓以外の者達である。

結果は、一、二度共神人の敗北となり、結局神役人層が力を

得ていくわけである。それと共に戦敗の結果として、神人は再

び刀祢等の恥掌を全うすることが、次第に困難となつていくの

である。

鶴矢記云

神三郡試八る爾所事因方亂入之越山田神役人

依被執申京都無子細は問 賞其忠節三郡内所務

知行分三分一神役人中被免行乞状如件

永享三年十一月廿六日

外宮五位一祢宣

授る不此時分里土一揆の神役人本刀祢の預る神領の所務

知行分三分一を神宮より里宛行まれて執政すられ自立の一

揆人、神政を執らしめし旗興る里

光明寺古今云嘉吉六年八月八日当所神人と神役人騒動授る不

此時又刀祢方負く才三度の敗北な里

中宗康富記并日時記云嘉吉二年七月八日山田乱神人

神役人 雙執弓矢矣

授る不又刀祢方負く才四度の敗北な里此度ハ刀祢勢尽て

戦ふ事殆だ多須神役人=膝を屈して政務を与奪せられ刺

へ子弟を地下家ニ養ひしめて、其苗字を称して叙爵し且

政争を取置地下权任の祢あるに至る名分の紛乱これより

起れ里

永享三年（一四三一）十一月、国司北畠氏の被官が、神三郡に庄迫を加えようとした時に、山田神役人が京都の衆主及び武家に執奏し、ことなきを得たのであるが、この賞として「神三郡内所務知行三分の一」と神役人に与えられたのである。すでに宇治六郷、山田三方は、神役人の支配下にあり、自治体制を完備しつゝあつたわけであるが、これを機にその権勢は表向きのものとなつたとされるのである。

この向にも両者の対立、神人と神役人との争いは激化していき、次の史料にも見られる如く、文安、文明年間と続き、時には土一揆を煽動し、また北畠氏の介入もあつて外宮炎上、さらに山田焼失に至つたこともあるのである。

日次記 云文安六年閏十月宇治山田焼失

授る不此時神役人の輩専ら弓矢を取置しな里

日次記 山田長と云へ里是山田の長坂方須原方

岩洲方と三つ方方を分ちて与党し其三方集會の場所を三方會台所と云後小八権政を重むして、神役を他小謀里祢と替へて年寄と云然るに、慶長八年五月十七日將軍家の御朱印改書を願王んとて、一味連判せしもの廿四人改書

の御朱印を頂戴し来て他の年寄本を省記廿四人の集議會合して政務を執る故小群斥せられし年寄本ハ

居町小会所を設て又一町つゝ出し執政す今の町々年寄の

古家ニ移するものハ土一揆家の遺せる二及而三方年寄一

一味の家柄な里

荒木田、度會両姓の神人が、異姓の神役人に庄迫され、刀祢が虎絶のやむなきに至り、これにかわつて宇治山田の夷権を握つたのが年寄である。この上に成立する政治体制を年寄制、あるいは自治体制というのは、旧知の事柄である。

戦いは文安、文明を経て、天文廿三年に至つてはじめて後を絶つ。この史料は、文安六年、四度目の刀祢方の敗北を述べ、慶長八年將軍家改書を頂戴し、一応自治体制を確立したところまでを述べて終つてゐる。

以上の如く、内容としては非常に簡単なものであるが、最初にも述べた如く、まだ紹介されていない史料であり、莊園体制の解体と、自治体の形成過程を知る上には、好適な史料であると言えよう。

以上、簡単に史料紹介の概にとゞめおく。